

(国語科を中心とする教科横断的な活動)

「主体的に学び、自分の思いや考えを書きことができる子どもを育てる」

～教科横断的に書く活動に取り組むことを通して～

大阪市立姫島小学校

## 1 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標つまり日々の教育活動の土台となる理念として、確かな学力・粘り強く豊かな心・たくましい体力をあわせもつ「強い子」の育成を掲げており、この研究活動は、その理念につなげる具体的な取り組みの1つという位置づけである。本校の大きな課題である学力向上には確かな国語力が必要不可欠との思いから、重点教科を国語科として研究活動に取り組んできた。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現には、自分の思いや考えを伝える力が大切との考えから、その力の両輪となる「話して伝える力」・「書いて伝える力」の育成を目指してきた。コロナ禍による話し合う活動の制限・制約もあり、この3年間は特に「書いて伝える力」の育成に軸足を置いて取り組んでいる。国語科が中心・基盤ではあるが、教科横断的な活動を取り入れることで、「書いて伝える力」のさらなる向上と活用をめざしている。

## 2 研究の趣旨

研究主題設定の理由と重なるが、本校の教育活動全体としてめざしているのは、確かな学力・粘り強く豊かな心・たくましい体力をあわせもつ「強い子」の育成である。そして、その具体的な取り組みの1つである本校の研究活動がめざす子ども像は、より焦点を絞り、「さまざまな情報や知識・技能を活用して、伝えたい思いや考えを明確にして書きことができる子ども」であり、その力を生かして「主体的に学習に取り組むことができる子ども」である。そのような子ども像を実現するために、研究推進委員会を中心に、①指導案検討会 ②各学年の授業公開 ③研究討議会 ④授業内容の他教科への活用 ⑤他学年の授業から学んだことの活用 という大きな流れに沿って1年間の研究活動を進めた。

## 3 研究の概要

●めざす子ども像その1:「さまざまな情報や知識・技能を活用して、伝えたい思いや考えを明確にして書きことができる子ども」の実現につなげるために----

＜研究の視点の共有＞

- (1)「書くこと」における育成すべき資質・能力を明確にする。
- (2)「書くこと」における育成すべき資質・能力を培うために必要な授業実践を行う。
- (3)「書くこと」における育成すべき資質・能力が確実に定着するように繰り返し指導する。(他教科とも関連させ、同様の活動の機会をつくることで定着を図る。)

＜研究の視点のうち、「書くこと」における育成すべき資質・能力の整理共有＞

### ■1・2年

- ・書き言葉---ひらがな、カタカナの読み書き(表記) 助詞(「は」「へ」「を」)の使い方 句読点の打ち方 かぎかっこの使い方
- ・語彙---身近なことを表す語句 文や文章---主語と述語

## ■ 1・2年つづき

- ・題材の設定---経験したこと、想像したことから書くことを見つける。
- ・情報収集---必要な事柄を集める。      ・内容の検討---伝えたいことを明確にする。
- ・構成の検討---事柄の順序に沿って。      ・考えの形成と記述---語と語や文と文の続き方を意識し内容のまとまりがわかるように。

■ 3・4年    ■ 5・6年については紙面の都合上省略するが、大阪成蹊大学 辻村敬三教授の指導と著作「国語科内容論×国語科指導法」（2019 東洋館出版社）をもとに、低学年・中学年・高学年の各段階における重点項目を整理共有した。

### <研究の視点のうち、「書くこと」における育成すべき資質・能力を培う授業実践>

全学年および特別支援学級で、指導案検討を進めて授業公開をおこない、研究討議会での討議・研修を進めた。授業の中では、一人一人が十分に考えることができる問題解決の場面を設定し、自力解決のための手立てや支援を工夫することに留意した。

### <研究の視点のうち、「書くこと」における育成すべき資質・能力を定着させる指導>

国語科で学んだことを他教科で活用することに留意した。そのための他教科との関連一覧表を学年ごとに作成することに取り組んだ。また、朝の学習時間での関連学習を設定した。さらに、学期末スピーチの取組を設定した。（1学期3・4年 2学期5・6年 3学期1・2年---自分の思いや考えを書いて話す活動。）これらにより、学んだことを活用する場、繰り返し学ぶ場や時間の確保を図った。

## ●めざす子ども像その2：「主体的に学習に取り組むことができる子ども」の実現につなげるために-----

前述したように、授業の中で一人一人が十分に考えることができる問題解決の場面を設定し、自力解決のための手立てや支援を工夫することに留意した。また、振り返りの書き方を提示し、何を学び・何ができたか・次の学習にどのようにつなげていきたいかを自覚できるようにした。＝「なしともも」（なにができたか しったことは ともだちの考えを聞いて もっと考えたいことは）の活用による。さらに、全学年で同様の評価に取り組み、次年度の評価の充実につなげることを目指した。そのような評価活動として、年度はじめと各学期末に同じような内容の文を書き変容を見取る評価活動や、授業公開の単元で児童が書いたものに対する共通の評価基準での評価活動をおこなった。

## 4 研究の成果と今後の課題

研究活動の内容の充実を実現し、研究主題に沿った教員の意識向上とスキルアップを果たすことができたことは確かな成果と考えている。また、国語の授業が「ほとんどわからない」という児童を3つの学年で0%にできたことや、自分の思いや考えを書こうと努力している児童が増えてきたことなど、児童の好ましい意識変容を実現した。

しかし、教員は児童が書くことができるようになってきたと感じているが、児童アンケート結果では「書くことができるようになってきた」という児童をすべての学年で増やすところまでは至っていないなど、「書く力」が明確に向上しているといえる根拠を獲得するには至っておらず、今後の課題である。